

## いわて生協 3月11日「がんばろう！岩手セール」

### 被災者の手作り品を販売する「復興応援商品コーナー」

いわて生協は、震災から1年を迎える2012年3月8日～11日の4日間「がんばろう！岩手セール」を県内各店舗で実施しました。この試みの狙いには、地元の生産者・メーカーが元気になることが地域の復興に欠かせないという想いが込められています。

以前から付き合いのある県内の生産者やメーカーの商品を「復興応援商品」として数多く取り揃えました。また、ちょうど1年目となる11日には、お買い物をされた方に「復興祈念タオル」をレジで1枚ずつ配布しました。全店舗計約1万6,000枚(取材に伺った奥州市のコープAteruiでは1,600枚)を先着で配布しました。

この期間、被災した方々の手作り品や沿岸部の特産品を販売する「復興応援商品コーナー」も開かれました。コープAteruiでは、店舗入り口正面に設けられ、大変な盛況ぶりでした。

ここには、海産物卸会社「(有)エムエムフーズ」(『かけあしの会』と連携)の水産加工品や塩こうじ、塩サイダー、Tシャツ、新聞紙で作ったエコバッグなどが並びました。これらの商品のラベル貼りは、仮設住宅で暮らす方々に委託したとい



「復興応援商品コーナー」には、  
多くの人が立ち寄っていた。

います。  
さらに、盛岡市の被災地支援チーム「社団法人SAVE IWATE」の被災者の手仕事による復興ぞうきんや三陸で採れたクルミ。陸前高田市の障がい者福祉施設「すずらんとかたつむり」の「がんばろう陸前高田」のキーホルダー型のお守り。「大船渡中学校仮設住宅」で暮らす方々からは、支援物資を使って作

った「つかむにゃん(ネコ型クリップ)」や「手ぬぐい帽子」。「NPOぐるっとおおつち(大槌町)」は、支援物資である軍手を使った大槌町のマスコット「おおちゃん」。実にさまざまな手仕事による商品が、「復興応援商品コーナー」には並びました。

「『復興応援商品コーナー』は、初日からかなりの反響があり、4日間で30万円分ぐらいの商品を準備していたのですが、初日で16万円もの売り上げがありました。もう売れ切れている商品もあるんです」とコープAterui店長の北島正さん。

さらに北島さんは、被災者による手作り品を販売することについて、「仮設住宅などで暮らす方々(特に勤めに出る機会がない方々)が手仕事をするので、人と交わる機会ができ、月に2~3万円ではあるが作業報酬が入ります。自分が社会と関わり、人の役に立てたと感じられることは、精神衛生上とてもいいこと。この取り組みに大きな意義を感じ、販売を通じてその一端を担っていきたいです」と話します。

## 沿岸部への思いを寄せて商品を購入

「復興応援商品コーナー」では、組合員と職員のボランティアが協力して接客を担当。4～5人の方がブースの内外で声を上げ、復興商店の商品を元気にPRしていました。なお、11日は午前9時から13時半までが組合員、その後は勤務を終えた職員の方が接客していました。

午前の接客を担当していた1人である組合員ボランティア・水沢コープ理事の佐々木世津子さんは「1年経つけれど、また地震がくるのではないかという不安は消えません。特に子供たちが、地震へのストレスを感じているのが伝わります。津波被害のない内陸部でも、いまだ元に戻ったとはいえない状況なのです。だからこそ、自分にできる支援をやっていききたい。水産品を始めとした、かつて生協が扱っていた沿岸部の商品には、やっぱり愛着があります。必ず復興してほしいです」と今の想いを話してくれました。

「復興応援商品コーナー」で、母親に頼んで「すずらんとかたつむり」のキーホルダー型のお守りを買ってもらった小学生の少年は、「太鼓を披露するため陸前高田を訪れたとき、(変わり果てた街の様子に)本当に驚きました。少しでも支援したいと思って今日は、買いました」と話していました。また、バッジを購入していた、40代の男性は、「陸前高田の友人を失いました。まず、忘れないこと。風化させないことが大切です」と語ります。

他にも、「支援の気持ちはもちろん、沿岸部の商品は、商品そのものとしても魅力的。沿岸部の産地や生産者には必ず復興してほしい」と応援するご夫婦、「少しでもつながりを持ち続けるよう意識しています。落ち着いてお互いに頑張りましょうね」と話す女性など、買い物をする皆さんそれぞれに沿岸部への思いを抱いていました。また、商品を購入される方々の中には、個人的な支援を行なっている方も多くいることがわかりました。



「復興応援商品コーナー」の商品を作られた方の案内掲示された。